

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：若手研究スタートアップ

研究期間：2008～2009

課題番号：20820034

研究課題名（和文）『枕草子』の注釈史研究

享受史復元の試みとして

研究課題名（英文）A Historical Study of the Annotations of "Makura-no-soshi"  
: An Attempt at Reconstructing a History of its Reception

研究代表者

坏 美奈子 (AKUTSU MINAKO)

和洋女子大学・言語・文学系・准教授

研究者番号：80453471

研究成果の概要（和文）：明治期までの『枕草子』解釈史の中から、昭和期に起きた使用底本の切り替え等によって、本文と同時に切り捨てられてしまった部分をすべて拾い出し、古注釈と現代注の見解の関係について整理する作業を行った。『枕草子』について一度は断絶し、読みの歴史から失われてしまった「享受史」を復元する研究により、各章段・場面に関する新しい解釈の成果を得るとともに、現代における『枕草子』研究の問題の本質と課題とが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The popular edition until the Meiji Era of "Makura-no-soshi" was superseded by other text in the 1950s. The present study accomplishes a task of retrieving all the lost annotations for reconstructing 'the history of reception of "Makura-no-soshi" '. In the process, it not only explores the possibility of new interpretations on each scene and chapter of this essay but also clarifies the nature of the problems of studying the age-old classic in the present day.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,130,000	339,000	1,469,000
2009 年度	750,000	225,000	975,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,880,000	564,000	2,444,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：国文学 『枕草子』 本文研究 注釈 校訂 享受史

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 底本の問題と本研究の可能性

徹底的な本文的検証の歴史を経ることなく、『枕草子』の研究が、「三巻本」という一つの本文に限定して行われるようになって

久しい。そのような状況にあって、報告者は、大学院生時に発表した「『枕草子』「南の院の裁縫」の条の事件年時について（上）・（下）」（『語文（日本大学）』第 84、85 輯 1992・12、1993・3）以来、『枕草子』の主たる両系統本、「三巻本」と「能因本」の本文比較を

踏まえた解釈研究を行ってきた。当該の論文では、『枕草子』の虚構性をめぐる説(悲劇の後宮の産物として、現実の悲嘆を滑稽に転じる虚構性を持つという見方)の論拠となっていた部分の記述が、「能因本」の本文もあわせて読むと、通説に言う「喪服調製」の場面などではなく、清少納言の主家・中関白家盛時の晴れの行事、道隆主催の「積善寺供養」の折の出来事として解されることを論証している。

この作品については、「三巻本」のみで論じられてきた結果、その必要が強く意識されながらも、かつての流布本(能因本系統)をあらためて対象とした研究を展開することは、確かに容易ではなくなっている。使用底本を限定して行う古典研究の最も大きな問題がここにある。『枕草子』という作品をめぐっては、本文選定の時期が早過ぎたと言わざるを得ない。一度断絶した享受史を復元することは容易ではないが、今こそが、その最後のチャンスであろうと考える。それを行おうとする報告者のこれまでの研究は、能因本に対する価値認定と作品本文に対する新たな解釈という両面において評価を受けている。

## (2) 雑纂形態本の重要性

特に研究が遅れている類纂形態の伝本、「塚本」などの場合は、本文形態の種類が異なるということで、三巻本一辺倒の研究状況の中でも比較的手がつけやすいところと言える。しかし、これは『枕草子』という作品の歴史的意義と密接に関わる日記的章段群を欠くものであり、やはり、主たる両系統の一つとしての、「能因本」研究の復活を考えることが差し迫った課題であり、かつ、有用性の高い課題なのである。

また、章段の配列等をめぐって、『春曙抄』など古注釈の「区切り方」を前提とする研究は、注釈行為の一つではあっても、原態に近づくための方法とは異なるので、注意を要する。

## 2. 研究の目的

### (1) 「能因本」の位置

現在では、使用本文を「三巻本」に定めて行う解釈研究が学界の常道となっているが、この系統の本文には、いわゆる「意味不詳」の語彙が殆どなく、仮名遣いや文法の面からみても非常に整っていて分かりやすいという特徴がある。伝来の過程に藤原定家が関わっているらしいということ(「毫及愚翁」奥書)もあり、昭和期の研究状況の中で、他本を措いて、唯一「善本」の位置に配された格好である。しかし、江戸期における流布本は、現在では読まれなくなってしまったもう

一つの主たる伝本、「能因本」系統の本文であった。北村季吟や加藤磐斎らによる古注釈の言説も、この系統の本文に基づく。また例えば、海外においていち早くこの作品の魅力を理解し、評価したアーサー・ウェイリーの抄訳本“The Pillow-Book of Sei Shonagon”(1928)も、能因本系統の注釈書である金子元臣の『枕草子評釈』(上巻1921、下巻1924)に拠ったものである。

### (2) 享受史の復元

明治期までの解釈研究は、古来営々と読み継がれてきた享受の歴史の上に積み上げられたものである。過去、流布本の位置になく、その意味で享受史上比較的新しい本文である「三巻本」が、徹底的な本文研究の検証を経ずに、唯一の研究対象とされることになった結果、『枕草子』の研究は、かけがえのない享受の歴史と断絶してしまっただけである。この現代の研究状況については、抜本的な見直しが必要かつ急務であると言わなければならない。

本研究「『枕草子』の注釈史研究 享受史復元の試みとして」では、明治期までの『枕草子』解釈史の中から、本文とともに切り捨てられてしまった部分をすべて拾い出し、古注釈と現代注の見解の関係について整理する作業を行うことにより、この作品をめぐって一度は断絶し、読みの歴史から失われてしまった「享受史」を復元することを目指した。

## 3. 研究の方法

### (1) 失われた解釈の収集・整理

古注釈書の掲げる解釈を対象に、現行の通説(現代注に見られる解釈)に引き継がれていない内容について悉皆的な調査を行った。使用本文による異同の問題を越えて、作品の享受相を明らかにし、さらに、時代的・社会的な背景と作品評価の関わりについて捉えようとしたものである。

調査の対象は、次の通り。(A)本文(江戸期の流布本):古活字本(十行・十二行・十三行)慶安刊本等 (B)古注釈書:北村季吟『枕草子春曙抄』、加藤磐斎『清少納言枕草子双紙抄』、岡西惟中『枕草紙旁註』 (C)明治期~昭和期の注釈書(「春曙抄」本系統):武藤元信『枕草紙通釈』(1911)、金子元臣『枕草子評釈』(上巻1921、下巻1924)等 (D)現代注:三巻本底本による現行の諸注

### (2) 調査の手順

まず、上記「調査の対象」中、(A)江戸期の各種本文の状況をめぐり、本文の異同と、形式的特徴(標題の形式・段の区切り方・章段の配列等)に注目して、その相違について整理する作業を行った。

上記「調査の対象」中、(B)古注釈書の本文と で検証した本文の関係について調査を行った。 ・ の作業では、古注釈書による解釈の前提となっている、江戸期本文の実態について捉えることを目的とし、解釈行為による本文の変化(校訂)に注目して整理した。

上記「調査の対象」中、特に(D)現代注による解釈(いわゆる通説)と、「古注」の解釈とを比較して、相違する点について悉皆的な調査を行った。特に、受け継がれなかった解釈 について抽出して整理する作業を行った。

#### 調査上の留意点

通説の元となっている現代注の言説は、「能因本」を底本とするものであっても、解釈上、「三巻本」本文による読みを当てはめていたり、また逆に、「能因本」本文でしか読み取れない内容を「三巻本」底本の注釈書の解釈として用いていたりする場合が存する。作品を真に理解し、評価するための解釈研究は、まず、両系統の本文を等価のものとして扱い、それぞれの特徴を明確に把握した上でなされなければならない。「能因本」を底本とする現代注の解釈には、既に「三巻本」による解釈が大きく影響していると判断されるため、この調査では、現代注について、まず「三巻本」を底本とする諸注を調査の対象とし、古注の解釈との比較を行った。

また特に、古注に示された見解については、その解釈上の根拠を明確に把握すべく、一々の例について検証した。何らかの典拠が示されているもののほか、伝来の本文の問題に起因するもの、時代的背景を有する見解など、多角的な視点によって分類を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 新しい解釈の構築

古注釈に見える解釈のうち、現代注に引き継がれなかった点を抽出する、初年次(20年度)に始めた調査を継続して完了させ、その成果に基づく実践的な研究として、当該の章段あるいは表現等について、両系統本併読の見地に立つ新しい解釈の提示に臨んだ。

#### データ(対照表)の作成

「本文対照表」の作成:江戸期の流布本ならびに古注釈書の本文に関する比較作業の結果をデータ化し、対照表として整理した。

「解釈対照表」の作成:古注釈と現代注の解釈に関する比較作業の結果をデータ化し、対照表として整理した。受け継がれた解釈と、切り捨てられた解釈 について顕現化して示すことを目的とした。

#### 解釈研究

前田家本、堺本の本文と上記 「本文対照

表」の関係について分析するところから、類纂型二本の本文的特徴について検討した。

それぞれ目的を有する編集行為の結果として、「前田家本」と「堺本」という類纂型の二種が存在している。これまでの本文研究においては、雑纂形態の両系統本、「能因本」と「三巻本」とともに四種並べて比較する方法が採られていたが(「校本」などの状況)ここでは、江戸期の流布本と比較することにより、類纂型の伝本について、編纂意識等、享受相の一つとして把握する方法をとった。

#### 解釈研究

日記・随想・類聚(「は」型・「もの」型)の各章段ジャンルについて、上記 の作業の結果(「本文対照表」及び「解釈対照表」と、

の類纂本研究の結果を踏まえた解釈研究の取り組みに着手した。章段内容についての享受史的共通項を核心として、一つの伝本に限定しない本文研究と解釈研究によって導き出される新しい解釈を提示する試みである。

### (2) 研究の現状と今後の課題

特に、上記 の解釈研究 の構想は、本研究の成果を実践的な研究活動として具現化するものとして、従来にない、独創的なものである。報告者は、この試みの一端を、すでに平成20年3月、学術論文として発表している。坏美奈子著『枕草子』五、六月の夕がた(能因本)と、「五月四日の夕つ方」(三巻本) 二つの本文が描き出す、異なる情景 (「和洋女子大学紀要(人文系編)」第48集、pp.33-48)。本文の比較分析において、「共通項」を抽出する方法を用いるなど、新しい工夫を試み、古注釈書の見解を辿りながら、享受相も踏まえた解釈を提示したものである。主要四系統本に共通する作品世界を見出すことを眼目とする、新しい解釈研究である。

古注釈研究・伝本研究を踏まえた上での本格的な読解研究を進め、本研究のさらなる成果として新たな注釈作業を展開すべく、初年次は、注釈行為によってまず損なわれ易い部分でもある、『枕草子』の随想性に注目して論じた(後掲、「雑誌論文」の )。「三巻本」の原典主義的な傾向については、すでに指摘しているが(坏美奈子著『新しい枕草子論 主題・手法 そして本文』新典社2004)本研究の作業を通して、(漢詩のごとく)整わず、(和歌のごとく)類型の枠に収まり切らない、『枕草子』の随想的な部分こそ、整版や校訂の過程でもっとも変化し易いことが明らかになった。

最終年度(二年次)は、特に、『枕草子』の問題章段(日記的章段)を取り上げて論じた(後掲、「雑誌論文」の )。これは、注釈行為のひとつとして、勅撰集編纂時における

理解の問題まで対象にした試みである。

また、作品及び作者が、時代によってどのように評価されてきたのか、作品の享受史について、社会的な動きとの関わりからも検証するべく、同時代の記録・先行する物語文学などもあわせて読み解く手法により、『枕草子』の文学性について新しく評価している。坏美奈子著『『伊勢物語』の手法 「夢」と「つれづれのながめ」をめぐって（二段「西の京」と一〇七段「身を知る雨」、および六十九段「狩の使）」』（『和洋国文研究』第45号、pp.1-14）。

以上、二年にわたる本研究『『枕草子』の注釈史研究 享受史復元の試みとして』の成果として、第一に、使用本文の急激な変化によって断絶してしまった旧来の読みの歴史を現在の解釈研究に有機的に役立てることが可能となり、第二に、複数伝わる本文の在りようを、享受されてきた『枕草子』の特性として具体的に反映させた作品解釈を可能にする、その基礎を作ることができたと考える。

報告者による「能因本を扱うとしても、部分的な批判や引用（援用）では実質的な意義をなさないのである」という、本文と解釈をめぐる主張は、津島知明氏による拙著の書評（『語文（日本大学）』第120輯 2004・12）においても、作品研究上の特に切実な問題として取り上げられた。

対象を「三巻本」一本に限定してなされる解釈には、他本によって成立しないものも少なくない。古典解釈上も、より少ない情報から導き出された結論が、誤ったものになる危険性はより高いと言えよう。

本研究における《享受史復元》の試みを通して、作品解釈と本文研究を車の両輪とした作品研究の局面が大きく展開することは間違いないと確信している。『枕草子』は、日本の古典を代表する作品の一つであり、その表現ないし内容が、現代の文芸や生活の中に血肉となって生かされていることを考えれば、享受史を尊重して現在の研究状況の足場を再構築しようとする本研究の意義は大きく重いと見えよう。

明治期の金子元臣に至るまでの長い享受史・研究史において、ようやく「随想」としての作品の核心（主題性）の把握、また独自性の高い文章の読解がなされようとしていたのである。研究の初めに唱えた「切り捨てられてしまった部分（解釈）」とは、決して大げさな表現ではなかった。昭和中期～後期にかけて起きた使用本文の切り替えの動きとその結果により、既になされていた読解上の多くの発見が、後代に受け継がれることなく、置き去りにされることになったのである。「能因本」系統の校訂本文である「春曙抄」本に対する批判が、そのまま「能因本」その

ものの否定に直結してしまった経緯もある。読み継がれてきた本文を手放すということは、享受の歴史を手放すということでもある。「三巻本」を底本とし、場合によって「能因本」等、他本の状況を鑑みて按配するという方法によるテキストは、肝心の、解釈研究のための確実な地盤とは言えない。

先入観を排し、両系統本を等価のものとして扱う、新たな視座による本文研究の推進とともに、本研究において試みた失われた享受史の復元作業を、今後も資料の範囲を広げて、さらに推進していく必要がある。

本研究を経て、日記・随想・類聚各章段群それぞれに、通説とは異なる、新たな特徴や意義が見出されることになった。報告者は、これまでに、両系統本併読の見地に立つて行う、解釈上の新見を多く提出しているが、本研究では、古注釈に見える解釈等について、傍証的に参観するにとどめず、享受史復元の作業の根幹的な命題として、より積極的に評価した。その成果には、事実として断絶してしまっている明治期までの研究状況を、平成の現代における研究活動に合流させるという重要な意義が存する。

近時、「三巻本」を底本として新たに出版された注解付テキストでは、報告者が、これまでに「能因本」を積極的に用いて提示した新しい解釈を多数紹介する状況になっているが、その手法について注記されることはない。そもそも、「能因本」によって補わずに『枕草子』のテキストを作ることは、まず、不可能なのであり、現代における『枕草子』の享受も、この系統の本文によって長く培われてきた読みの歴史（享受史）に支えられているのである。

本文とともに切り捨てられてしまった読みの歴史を、現代の解釈研究にいかにかし得るか、本文分析と、解釈史研究の両面から検証し、本研究の成果に基づく解釈研究については、今後、本格的に展開していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

坏美奈子、春日遅遅 『枕草子』「三月ばかり、物忌みしにとて」の段の贈答歌、和洋女子大学紀要、査読有、第50集、2010、pp.245(1) 256(12)。

坏美奈子、『枕草子』の“随想”性 「葵」をめぐり記事、和洋女子大学紀要（人文系編）査読無、第49集、2009、pp.1 15

〔学会発表〕（計3件）

坏美奈子、花と鳥の歌三首 王朝和歌の新

しい解釈、和歌文学会（平成 20 年度和歌文学会第 54 回大会、2008・10・19、鶴見大学

〔図書〕（計 2 件）

坏美奈子、新典社、『王朝文学論 古典作品の新しい解釈』、2009、466

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坏 美奈子 (AKUTSU MINAKO)

和洋女子大学・言語・文学系・准教授

研究者番号：80453471

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：